

反骨精神あふれる改革者 ロシアの巨匠 テミルカーノフ 讃

東条碩夫



2015年6月から読響の名誉指揮者の地位にある ©読響

颯爽たる若き自信家

「きみ、卒業したら、僕のアシスタントになれ」

レニングラード（現サンクトペテルブルク）音楽院の学生で、最終試験の指揮を終えたばかりの22歳のワレリー・ゲルギエフに「すこぶる尊大な態度で」声をかけた指揮者は、ユーリ・テミルカーノフだった。「先輩は、strong manで、自信満々、ハンサムで、既に有名な人でした」とゲルギエフは回想している（注1）。

それは1975年のことで、テミルカーノフは37歳。レニングラード・フィルの第2オーケストラ（現在の通称はサンクトペテルブルク交響楽団）の芸術監督を務めていた時期だった。ちなみにその前年、彼はその「第2オケ」とともに初来日している。当時の彼の指揮映像を観ると、長髪で毅然とした物腰で、たしかに自信満々といった表情ではある。

キーロフ・オペラ時代の活躍

1976年4月、キーロフ劇場（現マリインスキー劇場）芸術監督・首席指揮者に任命されたテミルカーノフは、ただちにキーロフ・オ

ペラの再建にとりかかった。当時のキーロフはネステレンコやオブラストワら、レニングラード音楽院出身の優れた歌手たちを片っ端から「国家の劇場」たるボリショイ劇場（モスクワ）に持って行かれるような状態だったというが、テミルカーノフはこれに対抗し、セルゲイ・レイフェルクスら若手歌手を集めて「ニュー・キーロフ」のイメージを打ち出した。また、レパートリーに積極的に現代作品を入れ始め、就任の次のシーズンには、プロコフィエフの大作〈戦争と平和〉をキーロフで初めて上演したり、自らボリショイ劇場で初演したシCHEDリンの新作〈死せる魂〉をキーロフでも上演したりした。

特に1977年12月にポクロフスキーの演出でプレミエした〈戦争と平和〉では、翌1月の第3回公演の指揮に、アシスタントに採用した24歳のゲルギエフをいきなり^{ぼってき}抜擢起用するという大胆果敢な人事さえ敢行したのである。ゲルギエフはのちに語っている——「テミルカーノフは、この古い伝統に囚われたソヴィエトの体制に新しい考え方を導入したのです……彼はキーロフをボリショイの好敵手にしようとし、これを現実のものとししました。彼の下でカンパニーは輝きを取り戻したのです」（注2）。

つまりキーロフ・オペラは、現・芸術総監督ゲルギエフの時代に世界的に知られるようになったため、彼の下で再建されたと思われがちだが、実際は彼の前任者テミルカーノフの時代に、すでに確固たる上演の水準が築かれていたことになる。ほかならぬゲルギエフ自身が、それを明言しているのだ（注3）。これはしかし、私たちには意外に知られていない事実であろう。ペレストロイカ以前のレニングラードの楽壇の情報など、一般にはほとんど知られていなかったのだから。

そしてテミルカーノフも、1988年にキーロフを去る際、迷うことなくゲルギエフを後任として推薦した。「彼には、劇場の空気を以前よりも綺麗にし、良い環境にしてバトンタッチできたと思っています」（注4）。

キーロフ時代、テミルカーノフはオペラの演出も手掛けていた。代表的なものはチャイコフスキーの〈エフゲニー・オネーギン〉と〈スペードの女王〉で、これらは長くマリインスキー劇場のレパートリーになっていた。特に後者は映像ディスクで発売され、また1993年のゲルギエフとマリインスキー・オペラ初来日の際にも上演されている。

これは1994年に筆者がテミルカーノフにインタビューした時、直接聞いた話だが、自分の演出が改竄^{かいざん}されている、と彼は盛んに憤慨していた。特に〈スペードの女王〉の第3幕で、恋人ゲルマンが賭博の虜となってしまったことに絶望し、運河に身を投げる場面でのリーザに関して、「あのみっともない演技はなんですか!」。そして彼は立ち上がると、なんと自分の本来の演出によるリーザの演技を、実際にやって見せたのである。取り乱して走り去るのではなく、気品高くガウンを脱ぎ捨て、頭を昂然^{こうぜん}と上げ、あくまでもプライドを保ったままゆっくりと死へ歩いていくリーザの姿——それを演じるテミルカーノフの、なんと見事な俳優ぶりだったこと! あの素晴らしい彼の表情を、筆者は今でも忘れることができない(注5)。

反骨と義侠^{ぎきょう}の巨匠

故ムラヴィンスキーの後任として、テミルカーノフはついに1988年、第1レニングラード・フィル(現サンクトペテルブルク・フィル)の音楽監督(のち1995年より芸術監督)兼首席指揮者に就任した。それが当時の慣例だった「当局からの任命」によるものではなく、楽員たちによる選挙で迎えられたことは、画期的なケースだったという。非公開投票だったが、楽団のチェロ奏者セルゲイ・チェルナーディエフから筆者が聞いた話では、他の候補者はマリス・ヤンソンスとエミール・チャカロフで、テミルカーノフは彼らを10票か12票の差で抑えて選出されたのだそうである。テミルカーノフ自身は、キーロフ劇場の仕事に多くの予定を織り込んでいたために、しばらくは両ポストの兼任を希望したが、認められなかったという。

そういえば、どの機会だったか、彼は「母に連れられ、初めてムラヴィンスキーの指揮するこのオケを聴いたのが13歳の時でした」と話してくれたことがある。「もしや、お母さん、僕はいつかきっとこのオケの指揮者になるよ、とでも言ったのですか?」という私のミーハー的な問いに、彼は真面目な顔で「いやいや、私は自信家(!)ですけど、そんなことは考えませんでしたね。正直なところ、第2オケの指揮者だった頃に、いつか第1オケも指揮してみたいな、と思った程度です」と答えたのである。もっとも、『ユーリー・テミルカーノフ モノログ』(注6)では、「未成年の折に初めてこのオー

ケストラのピロードのような響きを耳にした時から、ずっとこのオーケストラと仕事をしたいと願って来ました」という話に変わっているのだが……。

ともあれ、新任の彼にとって、ムラヴィンスキーの偉大な影は、全力ではねのけねばならぬ存在だったことは言うまでもなからう。「オーケストラは彼(ムラヴィンスキー)を極度に怖れていた。その雰囲気を私が変えたのだ」と彼は言う。「第1フルト奏者のみで構成されていた楽員の委員会を、全員の互選で決めるようにと提案した。たちまち楽団の空気は明るくなった」(注7)。また、こちらは彼が筆者に話してくれたことだが、彼が第2フィルの指揮者だった時期、同楽団の楽員の給与が第1フィルの楽員のそれとあまりに格差が大きいの改善してほしいという当局への申請書を作り、総帥のムラヴィンスキーに同意の署名を貰いに行ったら冷たく拒否された、という事件があったのだそう。これは大先輩との大きな確執となって永く残ったらしい。

いずれにせよこれは、当時の状況の中では、大変な反骨精神の表れだったであろう。「私は非常に独立心が強く、聞き分けのない性格だったのです」と彼は自ら言う(注8)。思えば、彼が第1レニングラード・フィルの指揮者として初めて日本公演を行った1989年の記者会見で、「このオケを恐怖政治から解放した」という意味のことを述べ、ムラヴィンスキー神話の拡がる日本のジャーナリズムの間に物議^{かも}を醸したのも、その辺の鬱憤^{うっふん}がつい漏れたのかもしれない。もともと彼は、歯に衣着^{きめ}せずにものを言うひとなのだが……。



公演後に面会するテミルカーノフ、プーチン、シラク
©www.kremlin.ru

ただ、この「反骨精神」は、のちに彼がプーチン大統領に直談判をし、「今のような生活状況では、優秀な音楽家の国外流出を防ぐことはできませんぞ」と迫り、国内主要オーケストラや歌劇場、音楽院等の待遇改善を要求してこれを認めさせた、という一件と共通するものがあるだろう。それは2003年のことで、筆者がその年の「白夜祭」取材した時にも、「さすがテミルカーノフ!」という話でもちきりになっていたのだ。『ユーリー・テミルカーノフ モノログ』には、そのプーチンとのやり取りの様子が載っている。

豊麗な色彩感、風格の指揮

かつては「テンペラメント豊かな」（チェロ奏者チェルナーディエフの評）音楽づくりだった彼の指揮も、年齢を加えるに従い、落ち着いた堂々たる表現^{へんぼう}に変貌してきた。1989年に彼が日本でサンクトペテルブルク・フィル（以下SPO）を指揮したマーラーの〈巨人〉は、かなりテンポの動きの大きい激



2015年6月5日《定期》マーラー交響曲第3番 ©読響

烈な指揮で私たちを驚かせたが、その後、同楽団とのマーラーの〈復活〉（2014年）や、読響とのマーラーの第3交響曲（2015年）などでは、大河の如く悠然と押し流す指揮に変わってきたことは、周知の通りである。

SPOとのショスタコーヴィチの第7交響曲（1994年）の、これぞロシアの底力ともいべき圧倒的な演奏は筆者の忘れられぬ思い出だが、同団および読響を指揮して聴かせてくれた多くのロシアの作品における、豊麗な色彩にあふれた演奏、冬のロシアの澄んだ大気を想像させる夢幻的な演奏なども、私は忘れることはできない。いや、ロシアものだけでなく、SPOとのメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲（2011年）や、読響とのラヴェルの〈ダフニスとクロエ〉（2015年）などでも、柔らかな響きのうちに豊かな色彩を聴かせてくれたのではなかったか。

この数年来、テミルカーノフは、ほんのちょっとした身振りだけで、オーケストラを嵐のように沸き立たせるという指揮が目立ってきた。これこそまさに、巨匠ならではの大きさであろう。

〈とうじょう ひろお・音楽評論家〉

（注1、2、3、4）ジョン・アードイン著、亀山郁夫訳『ゲルギエフとサンクトペテルブルクの奇蹟』音楽之友社刊、2005年

（注5） この話を聞いた1994年夏、彼は「このあいだ劇場に呼ばれてこの曲を指揮した際に、問題の箇所を演出を全部元に戻してやった」と語っていたが、前掲アードインの著書には、その上演は1995年のことと書かれている

（注6、8） ジャミーリヤ・ハガロヴァ著、小川勝也訳『ユーリー・テミルカーノフ モノローグ』アルファベータブックス刊、2018年

（注7） 独フォノフォルム誌（1992年）

11月の公演

小林が魂を込める〈新世界〉、新鋭・伊藤が奏でる郷愁の旋律



11/17 日 第116回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14:00

指揮＝**小林研一郎**（特別客演指揮者） チェロ＝**伊藤悠貴**

ドヴォルザーク：**チェロ協奏曲、
交響曲 第9番〈新世界から〉**

現代音楽に^た長けた中川賢一と読響メンバーによるライヒ&メシアン



11/18 月 第23回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール 19:30（プレ・トークあり）

《**中川賢一と読響メンバーによるライヒ&メシアン**》

ピアノ＝**中川賢一***、小坂圭太 ヴァイオリン＝**瀧村依里***、**對馬哲男** チェロ＝**遠藤真理***、**高木慶太** フルート＝**倉田優、片爪大輔** クラリネット＝**金子平***、**芳賀史徳** 打楽器＝**西久保友広、野本洋介** 音響＝**有馬純寿**

ライヒ：**クラッピング・ミュージック、ダブル・セクステット**
メシアン：**世の終わりのための四重奏曲***

チェコの俊英ネトピルが振る〈ブラハ〉と〈シンフォニエッタ〉



11/23 土・祝 第222回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

11/24 日 第222回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮＝**トマーシュ・ネトピル** ピアノ＝**アレクサンドル・タロー**

モーツァルト：**歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲、
交響曲 第38番〈ブラハ〉**

プーランク：**ピアノ協奏曲、ヤナーチェク：シンフォニエッタ**

スークの傑作〈アスラエル交響曲〉&リゲティではケラスが共演！



11/29 金 第593回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮＝**トマーシュ・ネトピル** チェロ＝**ジャン＝ギアン・ケラス**

モーツァルト：**歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲**
リゲティ：**無伴奏チェロ・ソナタ、チェロ協奏曲**
スーク：**アスラエル交響曲**

11月公演の聴きどころ

11/17《**みなとみらい**》 読響特別客演指揮者の小林研一郎がドヴォルザークの人気交響曲〈新世界から〉を指揮する。この曲は小林がチェコ・フィルとドヴォルザーク・ホールで録音した思い出深い曲で、「作曲家が音に込めたと思われる木々のそよぎや、風のたおやかさなどを表現したい。人間臭さや心のひだを感じ取ってもらえれば」と語っている。79歳、円熟味を深めている“炎のマエストロ”が情熱のタクトで一つ一つの旋律に魂を込める。前半は同じくドヴォルザークのチェロ協奏曲を取り上げる。ソロはブラームス国際コンクールで優勝し、ロンドンで活躍する気鋭・伊藤悠貴。叙情豊かに奏でる郷愁のメロディーを味わいたい。

11/23、24《**土日マチネー**》 チェコの俊英ネトピルが読響に初登場し、プラハに関連する曲を取り上げる。ネトピルは、ドイツの名門エッセン歌劇場の音楽総監督、チェコ・フィルの首席客演指揮者を務め、ベルリン・フィルやウィーン国立歌劇場などに客演している注目株。プラハで初演されたヤナーチェク〈シンフォニエッタ〉は、村上春樹の小説『1Q84』でも話題を呼んだ名曲で、民俗的な響きが特徴。同じくプラハで初演されたモーツァルトの歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉の序曲や交響曲〈ブラハ〉も取り上げる。また、フランスの名手タローが、プーランクの洒落なピアノ協奏曲を繊細で美しい音色で表現する。

11/29《**定期**》 ネトピルがスークの傑作として名高い〈アスラエル交響曲〉で本領を発揮する。「アスラエル」は死を告知する天使の名。この曲は、師であり義父であったドヴォルザークと、その娘で妻オティリエの二人を追悼してスークが書き上げた大作だ。深い絶望を表すように死の影が覆い、最後は天国から一筋の光が差し救いの手が差し伸べられる。前半は、現代作品を得意とするフランスの名手ケラスが、リゲティの無伴奏チェロ・ソナタとチェロ協奏曲を披露する。チェロ協奏曲は、リゲティの自宅で直接レッスンを受けて録音に臨んだ「思い出深い作品」だそう。ケラスが紡ぎだす精緻な表現に耳を傾けたい。（文責：事務局）

イギリスの名匠ボルトンが〈第九〉を指揮！ 高らかに響く“歓喜の歌”



12/17 火 SHINRYO Presents 〈第九〉特別演奏会
東京芸術劇場コンサートホール 19:00

12/18 水 FUJITSU Presents 〈第九〉特別演奏会
サントリーホール 19:00

12/20 金 第627回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

12/21 土 第223回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

12/22 日 第223回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

12/24 火 第24回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール(大阪) 19:00



指揮=アイヴァー・ボルトン
ソプラノ=シルヴィア・シュヴァルツ
メゾ・ソプラノ=池田香織
テノール=小堀勇介
バリトン=トーマス・オリーマンス
合唱=新国立劇場合唱団
合唱指揮=三澤洋史
ベートーヴェン: 交響曲 第9番〈合唱付き〉

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

インターネットで24時間いつでもお申し込みができ、ご自身でお好みの座席をお選びいただけます。上記URLもしくはホームページのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

※初回お申し込み時は利用登録(無料)が必要です。

〈ボレロ〉で新年の幕開け！ ドイツの新鋭グランディが贈る名曲選



1/9 木 第628回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

指揮=エリ阿斯・グランディ
ヴァイオリン=前橋汀子
J.シュトラウスII: 喜歌劇〈こもり〉序曲
サン=サーンス: 序奏とロンド・カプリチオーソ
マスネ: タイスの瞑想曲
サラサーテ: ツィゴイネルワイゼン
モーツァルト: 交響曲 第35番〈ハフナー〉
ラヴェル: ボレロ

日下紗矢子ら読響メンバーが繰り広げる白熱のアンサンブル



1/10 金 第24回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール 19:30 (プレ・トークあり)

《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》
ヴァイオリン=日下紗矢子(読響特別客演コンサートマスター)
モーツァルト: ディヴェルティメント 第11番
シェーンベルク: 浄夜(弦楽合奏版)

下野竜也が現代音楽2作品を日本初演&アダムズでは上野耕平が共演



1/15 水 第594回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮=下野竜也
サクソフォン=上野耕平
ショスタコーヴィチ: エレジー
ジョン・アダムズ: サクソフォン協奏曲
フェルドマン: On Time and the Instrumental Factor
(日本初演)
グバイドゥーリナ: ペスト流行時の酒宴(日本初演)

お申し込み・お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390 (10時-18時・年中無休) <https://yomikyo.or.jp/>

■読売日本交響楽団スペシャルコラボレーション
さだ×よみ音楽会 ～さだまさし 読売～

10/28 19:00
月 東京芸術劇場コンサートホール

歌＝さだまさし

指揮・編曲・音楽監督＝渡辺俊幸

※曲目は調整中です。

[料金] 全席指定 ¥12,000

[お問い合わせ] サンライズプロモーション東京 0570-00-3337

■NISSAY OPERA 2019 オペラ〈トスカ〉

11/9 11/10 各日 13:30
土 日 日生劇場

指揮＝園田隆一郎 演出＝栗國 淳

出演＝砂川涼子、工藤和真、黒田博、デニス・ビシュニャ ほか(9日)

岡田昌子、藤田卓也、須藤慎吾、妻屋秀和 ほか(10日)

ブッチーニ：歌劇〈トスカ〉(全3幕・イタリア語上演・日本語字幕付)

[料金] S¥10,000 A¥8,000 B¥6,000 学生 ¥3,000

[お問い合わせ] 日生劇場 03-3503-3111(10～18時)

■読売日本交響楽団 松戸特別演奏会

11/16 14:00
土 松戸・森のホール 21

指揮＝小林研一郎

チェロ＝伊藤悠貴

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲、交響曲 第9番〈新世界から〉

[料金] S¥4,500 A¥3,500

[お問い合わせ] 森のホール21チケットセンター 047-384-3331(10～19時/休館日を除く)

■ウェスタ川越 読響ニューイヤー・コンサート

2020年 1/5 14:00
日 ウェスタ川越 大ホール

指揮＝原田慶太楼

ヴァイオリン＝前橋汀子

J. シュトラウスII：喜歌劇〈こもり〉序曲

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲

ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

[料金] S¥5,000 A¥4,000 (ウェスタ川越WEBメンバーズ割引あり westa-kawagoe.jp)

[お問い合わせ] 読響チケットセンター 0570-00-4390(10～18時)